

内閣府青年国際交流事業既参加青年調査

- (1) 名 前： Maximiliano Montoya (マキシリアーノ・モントーヤ)
(メキシコ)
- (2) 年 齢： 27 歳
- (3) 参加事業： 平成 27 年度次世代グローバルリーダー事業「シップ・
フォー・ワールド・ユース・リーダーズ」参加青年
(※SWY28 相当) (2015 年度)
- (4) 職 業： 「Global Changemakers」(国際 NGO) デジタル
メディアマネージャー、地域型 NGO「Juventud Unida」
役員、「Card Dash」CEO



■ 参加のきっかけ

応募当時、私はモンテレイ工科大学の社会貢献プログラム学部でインターンとして働きながら、環境工学の学位取得を目指しておりました。前職の同僚が世界青年の船事後活動組織 (SWYAA) メキシコから次世代グローバルリーダー事業「シップ・フォー・ワールド・ユース・リーダーズ」(SWY28 相当、以下「世界船」という。) 参加青年募集の情報を得て、私の興味に合致するプログラムなので応募してみてもどうかと勧めてくれたことがこの事業を知ったきっかけです。事業を通じて、**国際的な環境でボランティア活動をする機会を得ながら、日本の文化を直接学べばと期待して応募しました。**加えて、主に日本という国、日本文化や価値観をよく理解したい気持ち、好奇心がありました。私の育った都市では工場も多く、戦後から存在している日系コミュニティがあったので、日本は近い存在でした。高校に入って日本語を 3 年間習い、素晴らしい先生のもとで言語のみならず文化についても多くを学びました。私が応募した時には大学を通じた広報のほか、ボランティア関連団体、日本関連団体、ソーシャルメディア (当時は Facebook) でも世界船の参加青年の募集・広報がされていたので、情報はすぐに広まり 12 人の参加枠に 1,500 人の応募があったと聞いています。

ボランティア活動に対する期待に対してはいかがでしたか。

参加してみて、期待以上のものだったと感じています。私がこのプログラムについて予想していなかったのは、日本政府、主催者、管理部、スタッフの方々が親切かつ丁寧にご対応くださったことです。皆様の温かいおもてなしは、私の経験を特別なものにしてくれました。私の「国際的な環境でボランティア活動をしたい」という当初の希望は、長期間 1 つの活動をするというようなイメージでした。しかし世界船では、船内でもたくさんのボランティア活動が展開されており、世界各国でどんなボランティア活動が行われているかを知れたこと、そしてスキル習得や研修の要素もあったことから、「1 つの活動をやり続ける」以上の収穫がありました。何かやってみようと思ったことに飛び込み、このような多様なボランティア活動に触れることで、私の今のキャリアにもつながったと思います。もちろん船内でできることは限られていますが、下船後どうしていきたいか、誰と何をするか、というのを既に考え始めるからです。そして、**世界中の仲間たちはどこにようと、何をしようとして、「社会に変革を起こしていく」という同じ目的のもとに、活動します。**ですから既参加青年や事後活動組織とは、定期的な活動だけではなく、何か季節的、偶発的な機会でも、こんなことが聞きたいと思った時に聞いたりして、自分のコミュニティでの活動に活かしています。私は音楽に詳しいロシア青年と意見交換して、自分が音楽に関する活動をする時にアドバイスをもらったりしています。

■ 選考時に、コンフォートゾーンから出ると決断

世界船は、異文化理解のためのユニークな機会を提供してくれます。このプログラムに参加する中で、特に有益だったのは、10 か国から集まった他の参加青年と幅広く交流できたことです。プログラム参加前、私は自分のことを内向的な人間だと考えていました。さまざまな成果を出すために多くの努力をしましたが、自分の本当の可能性を引き出すには何か足りないと感じていました。ボランティア活動に関しても、応募を躊躇したり、自分からアクションできないことが多かったりしたのです。しかし、世界船に参加して、**自分の居心地の良い場所（コンフォートゾーン）から一歩踏み出すために背中を押してもらった**感じでした。世界船の1次選考を通過し、ボランティア活動の実践があったのですが、その時「今のシャイのままではダメだ、変わらなくては」と思ったのです。それは「グループの中で目立とう、優位に立とう」ということではなく、「この1日のボランティア活動で変化を生むことができる。だからもっと積極的になって、よいチームプレイヤーとなって、チームの色々な意見を引き出そう、楽天的に、夢中になって、取り組もう」と思ったのです。内容は地域の公園の清掃と修復だったのですが、「今日この活動を終える時には、地域の人に、安全で楽しく使ってもらえるような状態を目指そう」という心持ちで臨みました。そのマインドセットを、世界船までずっと持ち続け、日本に到着した時も「プログラムは思ったより短いし、全てを吸収したい。だからシャイな自分ではなく、一人でも多くの人と話そう」という気持ちで、コンフォートゾーンから抜け出したのです。自分が自分のルールを破ると、一緒に追従してくれる人も出てくるので、私は他にシャイな人たちの背中も押せたと思います。リーダーシップの強化だけでなく、自分のキャリアパスやスキルアップの面でも特に有益なプログラムだったと思います。**効果的なコミュニケーション、自信を築くこと、信頼性、そして成長のための自己開発**に取り組む機会を得ました。

■ 「生きがい」を見つけ、「生きがい」のある毎日を送る

世界船は、私が**若手リーダーとして経験を積むための最も重要な基盤**の一つとなりました。現在のキャリアパスやスキル開発のためにも、世界船で得た価値観や教訓を大切にしています。私が世界船で最も大切にしていることは、「**生きがい**」という概念を学んだことです。キャリア・プランニングに関連したセミナーだったと思いますが、世界船のプログラムが終了し、これから現実に戻るというタイミングで、ファシリテーターの一人が「世界船のプログラムが終了したらどうするか」というテーマで、話をしてくれました。そこで、自分の“生きがい”（purpose in life）について3つ書くことというお題がだされました。私は“生きがい”という日本語を高校時代に聞いたことがあったので、この言葉は覚えていましたが、表面的で深い意味は知りませんでした。スペイン語でも、「生きがい」については「人生の目的」（purpose）として説明はできても、それをどうやって見つけるかについては語られていません。ファシリテーターの問いに対して、私は「人を助けることがしたい」と書きました。

日本の概念である「生きがい」は、人生の意味（meaning）を見つける、ということで、プログラム中はまだ抽象的でしたが、そこから色々試し、今やりたいことができています。ですから、当時自分の想像している範囲での「人助け」ではなく、それを超える形で、**私は“生きがい”を見つけることができました**。家を建てる、路上で誰かを助ける、そういう人助けしか思いつかなかった私が、国際 NGO と地域密着 NGO に関わり、ソーシャルメディアを駆使し、プログラムマネジメントをし、学校で活動する、そんなふうにご貢献できているのです。私は毎日、目が覚めると、自分の仕事を通じて人々の役に立とうと思え、人のために最高のものを提供し続けたいという気持ちを、プロフェッショナルとして、また一人の人間として、毎日持ち続けています。

私は**世界船に参加した経験を「贈り物」と**考え、心から大切に思っています。そして、世界船への参加を無事成し遂げたことで、その経験を日常生活でいかせるようになりました。事業に参加する前は、実体験の欠如もあり、日本について漠然とした知識しかありませんでしたが、世界船は、“生きがい”というコンセプトのように、日本の価値観とそれを日常生

活にどうにかせるかを教えてくださいました。そうすることで、私はより幸せな人生を送ることができる、そしてさらに周りの人を助け、コミュニティを向上させることができます。

■ 日本のホストファミリーとの思い出

2016年に世界船のプログラムで滋賀県を訪問し、現地でホームステイしたことは、最もポジティブな影響を与えた活動だと思います。私にとっては、最も有意義なものでした。短期間、日本の家族の一員になることで、日本人の優しさやおもてなしの心を直接体験することができました。ホームステイ先の家族と過ごした日々は、私の大切な思い出です。この経験のおかげで、私はプログラム中に最も成長し、それ以来、ファミリーから学んだ価値観を自分の人生に活かしています。

■ 青年の可能性を信じ、機会をくれた世界船

今こそ、世界の現状を変えようとする若者を支援する「船を活用したプログラム」が必要です。私にとって、この事業はリーダーシップ強化のための最高のプラットフォームであり、事業関係者の皆さんは、私の可能性を最初に信じてくださった方々でした。選考に合格した時、世界船は、私が今のように人に対して思いやりのある人間になれるよう、人生に必要な正しい機会を与えてくれました。ですから、もっと多くの人に私と同じような機会を持ってほしいと思うのです。世界船のように、事業がまず参加青年の可能性を信じ、学びと成長の機会を与えてくださり、後に青年が若いリーダーとして潜在能力を開花させ、世界を変えることができるような場所が必要だと考えます。

選ばれた参加青年の共通点は、「より良い、つながりのある世界を作りたいと願う、思いやりのある人間である」ことです。だからこそ、世界船の重要性は、強く堅実で本当の絆を若者たちが築く機会を与えることにあります。そうすることで、参加青年は自分の成長と発達に取り組むことができます。船内での交流は外的要因がない状態で、青年一人ひとりが真っ白なキャンパスのように、受容的になり、見方を共有し、相互理解のためのディスカッションを実現できます。このように青年たちは平和創造への道を歩むことで、世界船の高い成果を生み出すことができます。

■ 世界船のつながりを経て、今の仕事に

現在、私は自分で事業を立ち上げており、「グローバル・チャンジメーカーズ」という国際 NGO でデジタルメディアマネージャーとして仕事をしています。この団体で働くことになったのは、実は世界船で得たつながりのおかげです。世界船に参加した 2016 年、船上で「グローバル・チャンジメーカーズ」のプログラムに参加したことのあるニュージーランド青年に出会い、応募を勧められました。その後、面接を経て、この団体が主催する「グローバル・ユース・サミット」に参加できる奨学金を得ました。このサミットは、世界船のコンセプトとも似ていますが、世界中の若者 60 名がスイスに 1 週間集まり研修を受けるものでした。この 1 週間で社会事業やユースワーク、プログラムマネジメントについて学ぶのですが、私は世界船の時の熱い思いもあったので、初日から「1 週間は短いから、小さな話は置いておいて、世界をどう変えたいかについて話そう！毎朝目覚めて、生きがいを感じるものは何？」と直球で語りました。まるで世界船の延長のような感じで参加しました。その 4 年後の 2020 年、卒業生としてフルタイムのリモートポジションに応募し、採用されました。ソーシャルメディアはどちらかといえば私の趣味の領域でしたが、当時の私を覚えてくれていた上司が、やる気があり対人コミュニケーションに優れるということで、仲間に加えてくれたのです。この仕事では、若者が私たちの団体にアクセスしやすく、私たちのネットワークに参加しやすいよう、ソーシャルメディアを使つてのコミュニケーションを担当しています。私たちのミッションは、より包括的（インクルーシブ）で公正、かつ持続可能なコミュニティに向けて、若者が前向きな変化を起こせるよう支援することです。私たちの活動内容は、スキル開発、能力開発、メンタリング、助成金提供です。私のチームは 5 名なのですが、別々の国に

住み、違う文化、違うタイムゾーンで生活している中で、オープンマインドでいることが大切です。船の日常で起こっている**文化間の違いを経験済みですから、あらゆる状況に対応**ことができ、世界船の経験が今の仕事で役立っています。そして、「世界中の若者が課題解決のために力をつけ、地域を変えていく」ことを応援できる、素晴らしい仕事に就けています。

■ 社会活動に対する意識の変化

私は、私たちの世界がいかに多くの課題に直面しているかを学び、自分の住んでいる地域だけでなく、あらゆる場所で行うべきことがあると分かるようになりました。**世界船のおかげで、自分にできることがもっとたくさんあることに気づき、どこから始めればいいのか分かりました。**私は帰国後、「Think global, act local.」（地球規模で考え、地域で行動する）を常に念頭に置きながら、自分のコミュニティで活動を開始しました。

私にはすでに地域での青少年や難民への支援活動を行っていましたが、帰国時には新しい視点を加えて活動することができました。世界船で仲間が共有してくれた戦略や経験を、ローカルに落とすことができたのです。**自分の地域で活動する**というのが私のモットーなので、すでに課題がある身近なこの地でやることを大切に思っております。そして新しく国際団体で働き始めたというのは、私のメキシコでの経験が他国でも役立つかもしれないと思って始めたことなので、いまこれらの活動が社会を変革する力となり、インパクトを与えることができ嬉しく思います。

■ 寄港地活動実施のサポート

最後に、パンデミック直前の2020年にメキシコで開催された寄港地活動についても述べたいと思います。事後活動組織メキシコ経由で寄港地活動の話があり、ボランティアを募る形が取られました。既参加青年11人で小規模チームを発足し、様々な活動の企画に参加しました。2ヶ月で全ての準備をする必要があり、地方行政とのやりとり、活動の準備、交通、全ての調整をしました。国際ボランティアを募集したところ、寄港地活動+国際大会のようになってしまい、少し手に負えなくなりましたが、北米やラテンアメリカから80名が集まりました。その時も、世界中から既参加青年が集まり、オープンで積極的に活動に参加してくれるなど、参加回が違っても同じパッションを持つ方々に会うことができ、**世界船を追体験**しているような感覚になりました。



第 32 回世界船、エンセナーダ寄港地活動の中心メンバーとして活躍（筆者右）

■ 既参加青年とのネットワークや出会い

既参加青年の間たちとは、今でも連絡を取り合っています。世界船参加後、様々な機会に既参加青年と再会するチャンスがありました。2017 年、ドバイでソーシャルビジネスをプレゼンするコンテストがありましたが、私は大会参加のためスポンサーの獲得に向けて活動していた際に、UAE やバーレーンの既参加青年たちと会うことができました。お互いにこんなに遠くに住んでいても、必ず再会する方法があると分かりました。また、私の住むメキシコでは、メキシコを訪れたいという既参加青年を受け入れることができ、いつも心温まる思いでいます。日本の友人から「メキシコに行く」と連絡をもらうたびに嬉しくなり、私が案内できる機会をもらえたことを光栄に思っています。



2020年、エンセナーダでのにっぽん丸を背景に、既参加青年での集合写真

世界船参加後も、異なる参加回の既参加青年と会う機会があります。国際大会や寄港地活動などのイベントを通じて、刺激的な人たちと出会い、貴重な人脈を作り続けることができます。**世界船ネットワークは、私の人生において重要な役割を果たしています。**メキシコでは年に一度総会がありますし、お互いどうしているか確認ができます。私は3つの仕事をしているので、まだ役員としては参画できていませんが、事後活動組織では毎年何かしら企画されています。パンデミック後、多くの活動がバーチャルになりましたので、今ではより多くの既参加青年に画面上で会うことができます。私が母親を亡くした時、最初に手を差し伸べてくれたのは既参加青年の仲間たちでした。私は世界で一人ぼっちではないと知り、感動を覚えました。私の地元での世界船ネットワークに所属する友人たちは、辛い時にいつも私を助けてくれました。彼らがいなかったら、あの時どうやって自分を奮い立たせ、前に進んで行けたのか分かりません。世界船と関わるすべての人たちに感謝しているのは、そういった理由からです。

マキシミアノ・モンテヤ氏のプロフィール

社会起業家。2016年、21歳で平成27年度次世代グローバルリーダー事業「シップ・フォー・ワールド・ユース・リーダーズ」(SWY28相当)に参加。2019年、持続可能な開発工学での学位取得。現在、多角的なビジネスオーナーとして、法人向けIDソリューション事業(IDタグ、カードキー等の開発、製造)を展開する他、国際NGO Global Changemakersのデジタルメディアマネージャーを務める。また、地域社会の青少年のエンパワメントを目指すNGO「ユナイテッド・ユース」役員として、ホリスティック教育を通じた平和構築を目指し、栄養、スポーツなどの側面から活動。